【小学生区分】

宮城県優秀賞

「障がい者と共存して生きるということ」

松島町立松島第一小学校
６年　櫻井　龍

ぼくのお父さんの兄（おじ）は知的障がい者で、約４年前からいっしょに暮らすようになりました。家族の話によれば、幼い頃に車にはねられた後いしょうで障害を負ったのだそうです。普段は根廻にある松の実という作業所に通っていて、パンを売りに行ったり、ハンガー組立やおくり物用のお酒を区切るための段ボール組立などの作業をしています。コロナになる前、自分が一年生の時に施設見学のイベントがあり、お母さんといっしょに行ったことがありました。車いすに乗る体験や給食の試食、作業の様子をみていっしょにやったりしました。

思うことは、おじを含め作業所に通う人たちは一様に心優しい人が多いのだと感じました。普段いっしょに暮らしていなければこれ以上の感情はもたず、障がいを持たない人は障がい者にやさしくしましょう。ということになるでしょう。

しかし毎日いっしょにいると、どうしてもイライラすることが多いです。自分でトイレに行ったり入浴したり、身辺自立ができている軽度の障がいであってもです。過去に津久井やまゆり園というところで、元職員の人が入門している障がい者を殺傷する痛ましい事件があったと聞きました。死んでしまったり、ケガをした人はかわいそうだと思います。入所していた被害者の家族は、

「もうこれで人に頭を下げなくてもいい。」

と思ったといいます。

「障がい者は社会に不要な存在だからいなくなればいい。」と考えた元職員、当然道徳

的に受け入れられはしない考えです。しかし同居家族にはそう思う気持ちも分かるのです。

おじが子供の頃は、自分が小さい頃に亡くなった祖父母やその先代、父を含むきょうだいで暮らし、将来は面倒をみるように言われたと想像します。今は生きている間に障がい者の人が安心して暮らせるグループホームの入所を考えるのが主流になっています。もちろんうちも例外ではありません。入所できる年れいに制限があるとのことで、場合によっては自分が家にいる間ずっと同居かもしれず、父に万一のことがあった時、相続と同じように自分にほご責任がでてくるのではないかと母は心配しています。このように家族として関わることになると、道徳的によしとされているふるまいと自分のみにくい感情とたたかわざるをえなくなります。両親はちょくちょく、ぼくとおじはどんぐりの背比べだと言います。おじは小学１年生位の理解力で、漢字で自分の名前をかくのがむずかしく、計算も分からないようです。自分は６年生になり、難しい勉強もするようになりました。これからは父母とともに、ぼくもおじを支えていける様になっていけるようになりたいと思います。